



# さわらび

第 88 号

発行元：十和田市立中央病院

発行責任者：事業管理者 松野正紀

十和田市西十二番町14番8号

TEL.0176-23-5869

FAX.0176-21-1234

<http://www.hp-chuou-towada.towada.aomori.jp/02renkei/04sawarabiNews.html>

## 新年のご挨拶

十和田市立中央病院事業管理者 まつの 松野 せいき 正紀

新年明けましておめでとうございます。

この年末年始は地元十和田で過ごしました。穏やかな新年で、元朝参りは稲荷神社に行ってまいりました。元旦の朝から初売りをやっているのに驚きました。街の空洞化を言われて久しいと思いますが、まだまだ元気だなと感じました。

中央病院も名実共に地域の中核病院となるよう頑張っております。

去年は新しい取り組みとして、日頃お世話になっている地域の先生方と病院職員との交流を深めるための「連携の集い」と市民の皆様へに病院を身近に感じて頂く「病院ふれあいまつり」を企画させて頂きました。これは、丹野院長の強力なリーダーシップの下で進められ、初回としては充実した成果が上げられたと思っています。これには、中央病院を「地域の先生方や市民の皆様へに開かれた病院にしたい」という院長の熱い思い入れが背景にあります。今年もこのような取り組みを継続して進めて参ります。

最近では病院の職員の意識が少しずつ変わってきたように思います。病院の経営状況とか先行きについての危機感がそうさせるのかもしれませんが、職員のまとまりが良くなり、懸案事項への対応がスピーディになってきました。病院が本質的に変わっていく明るい兆しだと思っています。

私自身も含めて、今年のモットーを「明るく、楽しく、元気よく」としたいと思います。明るく元気のいい職員は間違いなく患者さんを明るくします。そのような環境づくりに努力して参ります。

日頃のご支援に心から感謝申し上げます。

今年もよろしくお願い致します。



## 在宅医療連携からの次の一步へ

### ～ 安心して生活できる地域創りを目指して～

地域医療連携室 副室長 よしむら すみひこ 吉村 純彦

在宅医療連携を何故しているのか？皆さんは在宅看取りをひろめるためと思っていませんか？確かに最期は家で過ごしたいという願いを叶えるために、在宅医療の整備は必要です。十和田は院内外の様々な方々の尽力により、在宅で最期を過ごしたい希望があればそれが叶う地域となりました。これは全国的にみればまだまだ数少ないのが現状です。

それではもう在宅医療連携は必要ないのか？…

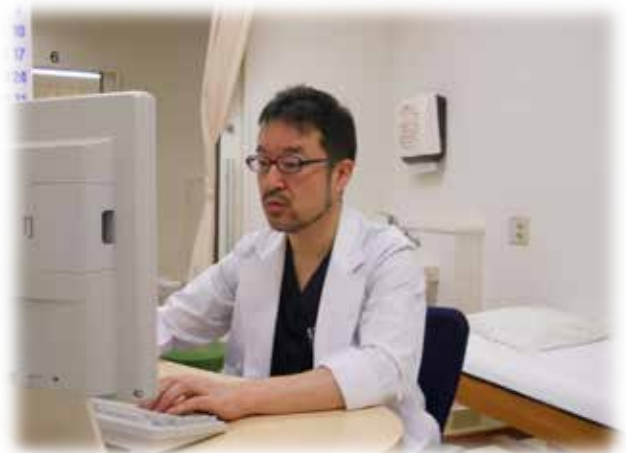
そうではありません。在宅医療連携の本来の目的は、

たとえ現在の医学で治癒できない病状になり自立した生活が難しくなったとしても、その人がその人らしく最期まで安心して楽に過ごせるような地域を創ることです。これを実現する為には、様々な医療資源が必要です。十和田のように医療資源が少なく、財政も苦しい地域では、お金をかけずに少ない専門職で地域を支える為に、地域の医療と介護と福祉が、役割分担しながら効率の良いケアを提供できるように地域医療連携の体制が必要になってきます。当院では在宅医療連携を通じて、特に地域の医療と介護との連携を推進してきました。ここ数年当地域で在宅医療を支えるチームの質は非常に高くなってきています。在宅看取りの質の指標に在宅看取り率（訪問診療を導入し在宅で看取った人の割合）があります。全国平均60～70%、在宅看取り専門の診療所でも80%台がほとんどですが、当院は昨年90%を超えています。

しかし、消費税率は上がりますが国の財政はどんどん厳しくなっています。人口減少もすすむなか、国は社会保障制度改革国民会議で、今後の地域創りを自助・共助を基本にし、地域の実情にあわせて市町村単位で考えるように大きく舵を切りました。今後十和田では、若年人口が減少し高齢者が急増していきます。当地域でも孤立死が増加してきているなか、現実的にはもはや地域医療連携体制の強化だけでは、今後増加していく生活弱者の方々を支えるのは限界となってきています。十和田で暮らしていく人々が、自分たちが生活弱者になった時に、どのような地域であれば安心して生活していけるのか、地域住民自らが考えコミュニティとして協力し合うこと、すなわち地域住民も巻き込んだ地域包括ケア体制が求められているのです。

当院では在宅看取りを推進することにより在宅医療連携を推進し、地域の多職種を繋ぎ、地域医療連携を発展させる一翼を担ってきました。しかし今後はより質の高い連携が求められますし、行政はじめ多職種、多職域とのより一層の連携体制の構築、そして住民を啓発しながら住民参加でのオール十和田で支える地域包括ケア創りに取り組まなければならないのです。現在の在宅医療連携促進の取り組みが安心して生活できる地域創りにつながるよう、一步一步進んでいければと考えています。

今後ともご協力ご支援を宜しくお願い致します。



# 緩和ケア認定看護師の紹介

緩和ケア認定看護師 八重樫 学

みなさん、こんにちは。

緩和ケア認定看護師の八重樫学です。ピカピカの認定1年生です。

私は現在6階東病棟で勤務しています。6階東病棟は消化器病センターの内科部門で、検診などの再検査、術前・術後の検査、食欲不振や体調不良の原因検索、糖尿病の教育入院など様々な患者さんが入院されています。また入院する患者さんが、1日に10人を超える事もあり、その中で残念ながら「がん」と診断され告知を受ける患者さんがいます。

緩和ケア＝終末期医療・終末期のケアと捉えている方もいるかと思いますが、WHOの定義では「疾病の早期から」と記されています。この「疾病の早期から」がいつからなのかというはっきりとした提言はないのですが、私は「がん告知」の際に患者さん・家族は多くの支えが必要で、この支えの1つに緩和ケアがあるのではないかと考えています。

告知後の患者さん・家族にお話を伺うことがあるのですが、「頭が真っ白になって、何も覚えてないんです。」と話される事があります。この言葉は「がん告知」の衝撃を表していると思います。その衝撃の中で、今後の検査や治療の選択や同意が求められるのですが、患者さんの反応は一人一人違います。不安が表われているのか何十分も話し続ける患者さん、貝の様に「知らない・聞いてない」を繰り返す患者さん、泣き出す患者さんや家族もいますし、時には怒りをぶつけてくる患者さんもいます。「検査は怖い。転移が見つかったらどうしようって…。でもやらないと手術出来ないですよね？でも検査は怖いんです。」と複雑な胸の内を話してくれたりします。そういった患者さん・家族の思いに共感しつつ、しっかりと情報提供し、治療の方法の選択などの意思決定を支えて、術前検査や今後の治療、治療後の生活と、入院から退院まで一貫してケアさせて頂きたいと考えています。

また、私は緩和ケア認定教育過程に参加することで、当院が持つ緩和ケアチームと、地域が持つ在宅支援ネットワークの素晴らしさを改めて学ぶ事ができました。このネットワークは十和田市の「宝物」だと思います。様々な研修会に参加する際、「十和田から来ました。」と自己紹介すると、「地域医療の十和田ですよね。」「在宅の十和田ですよね。」と声をかけられます。この全国的に注目されている「宝物」のネットワークを今以上に軟らかくつなげ、がん告知から治療期・再加療期・そして終末期に至るまでの疾病の全期に渡って、揺れ動く患者さん・家族と十分にコミュニケーションを図り、また症状マネジメントと意思決定支援を支えていくチームメンバーの1人として活動していきたいと思っています。

これからもよろしくお願ひします。



## 外来診療担当医表

外来診療担当医表は随時更新しております。下記のURLからのご確認をお願いします。

<http://www.hp-chuou-towada.towada.aomori.jp/03sinryo/03gairaiDoctorList.html>



# お知らせ

## 病院ふれあいまつり

平成25年11月10日(日)、「十和田市立中央病院ふれあいまつり」が開催されました。

初めての開催となりましたが、医師や専門職によるチーム活動の紹介や各種医療の体験の他、ステージイベントや市民公開講座など盛況のうち終了しました。

当日あいにくのお天気の中、お越しくださった皆様、本当にありがとうございました。



## 病院大忘年会

平成25年12月20日(金)、富士屋グランドホールにて、恒例の「病院大忘年会」が開催されました。職員並びに連携先医療機関の先生方、お忙しい中多数ご参加いただきありがとうございました。



今月のアート

「今年もどうぞよろしくお祈いします。」

画 畑中 光昭

## X'mas Volunteer Concert

平成25年12月24日(火)、エントランスホールにてコンサートが開かれ、「故郷」や「花は咲く」などの名曲が披露されました。

